

講 評

39回目を迎えた本展は今年もすばらしい作品が各校から推薦され、子ども達のたのもしい様子を感じ取る事ができました。今回の特色は、小学校高学年や中学校作品が、例年よりも際立って優れたものが多かったことです。少子化ゆえに学校統合が進み、作品数は減少の傾向にありますが、ハイレベルの作品が多いことに審査員全員が驚きました。この喜びを現すために、関係機関の協力を得てこれまでにない程の奨励賞を増やしました。

本美術展は、子ども達の創造性を最も重視して審査を行っています。そのため、出来上がった作品そのものの「きれいさ、上手さ、正確さ、デッサン力、子どもらしさ」等を評価するのではなく、作品が出来ていく過程（プロセス）の中に「これまで見られなかった絵画行為、行動（創造性）」がどのくらい含まれているのかという視点で審査を行っています。このような評価法は日本国内では、仙北市の「県南美術展」がめずらしい視点で実施しているように見えますが、世界の先進国では常識的に行われています。

戦後の日本は、経済成長を重視するあまりに知識獲得と勝利にこだわる教科が優先され、美術は「心のうるおいを満たす」程度に理解されてしまいました。山形寛氏が編集した最初の指導要領がベースになり、大きな研究や改革もなく今日まで継続され、いまもって美術は「選択教科」になっています。改革のチャンスはいくらでもあったが、残念なことに明治から続いた「読み、書き、ソロバン」重視の日本人の閉鎖的感性を動かすことは出来なかったようです。戦後まもなく日本の美術教育に衝撃を与えたのは、H・リード著『芸術による教育』（植村鷹千代氏訳）です。私がこの本で驚いたことは、「子供には美術を教育してはいけない！」ということでした。その後、国外では多くの美術や心理学者によって、美術教育には創造性、独創性、イメージーション、コミュニケーション能力など、他教科ではできない能力が潜んでいるとして研究が進みました。1950年頃から、ENSEA（インシア）国際美術教育学会で、H・シャルネーが「デッサン」を単なる描写力訓練ではなく、創造力を培う「観察行動」として美術教育に定着させる論文を毎年発表しました。私も夢中で読んだことを思い出します。このように、「芸術・美術」が単なる感性や鑑賞力を高めるものではなく新しい発想の起業家や独創的な研究者を生み出し、ひいては経済力や国のGDPを向上させるのではないかという研究が進みました。このきっかけを作ったのは、1929年10月24日の世界大恐慌後にルーズベルト大統領のとったニューディール政策だと思います。芸術家の国家雇用（公共事業促進局 WPA 及び連邦美術計画 FAP）で、絵画では、ジャクソンポロック、マークロスコ、ベンシャーン、カンディンスキー、他分野では、グロピウス（ハーバード大学建築家）、ウォルトディズニーの「白雪姫」初演、ディズニーランド世界設置、その後の芸術の発展として、ポップアート、ジャズ、など。「芸術教育こそ国を救う」実績を世界は認めました。キンダー・ガーデン（幼稚園）から高等教育まで、新しい美術教育が基礎教育になってきました。今日では、多様な思考力を育てるベース教科のとして芸術・美術教育が充実してきました。例えば、エレン・ウイナー教授の研究は、美術教科の創造性には「①観察する能力、②粘り強く取り組む能力、③試してみる能力、④他者の視点に立つ能力、⑤振り返ったり評価する能力」が他教科よりも優れていることを実証しています。世界はこのような実績に影響され、次世代を担う人間を育てようとして努力しています、スウェーデンの「ビトラ・インターナショナル」や、マサチューセッツ州の「サドベリースクール」等、急速に世界に広がりつつあります。

地球規模で拡大する知識量を理解・把握することは人間の能力を超越しています。本美術展は、39年前からウイナー教授の美的創造力を織り込んで実践しています。来年は記念すべき40回を迎えます。これまで支援し続けてきた関係者に深く感謝しています。

秋田大学名誉教授 / 国画会会員 佐々木良三